第Ⅷ章　「生活改善普及」発信方法の課題

レディレグ大学大学院　太田美帆

今回の調査では様々な人に、様々な方法で「生活改善普及」について発信してきた。受け手となった人々の反応を基に、このトピックを開発協力の現場で発信する際、誰に働きかけるのが有効か、また、どのような工夫が必要かについて考察したい。

（1）誰に対して発信するか

1）村人

村で行ったワークショップでは、住民を相手に生活改善に関する色々なアドバイスをした。女性が特に関心を示したのはやはり紙漉きや料理などの技術に関する具体的なアドバイスであった。実際、塩の精製方法から、石鹸を固めるための苛性ソーダの作り方、色褪せない押し花の作り方、紙の漂白の方法までどんな質問でも生改さん[16]はその場で答え、まさに歩く辞典だと私は驚嘆した。もちろん村の女性にとってもこんなスーパーウーマンは見たことがないのだから、すぐに役立ち目に見える技術の話には皆大変熱心に耳を傾けた。

写真２３．積極的にワークショップに参加するパンダン・マンダマイ村の女性たち

現地の普及員が答えられないような質問にも対応できる生改さんの博識ぶりに感嘆した村人が「今度からいつもの普及員さんではなく、この人に来てもらいたい」といったほどである。これほどの評価は喜ばしい一方、しかし現地側からみればこれでは当地で永続的に活動している現地の普及員のお株を生改さんが奪うことになりかねない。この点に配慮し、村でのワークショップは、日本人が直接住民を指導する場としてではなく、「現地で指導している普及員が、村人と対話する生改さんの姿からその指導方法を学び取る場」として設定するべきではないだろうか。短期調査団の村人に対する最も重要な役割というのは、「応援団」としてこれまでの活動を認め、小さな刺激を与え、ポジティブな外部評価で更なる活動の発展を促すことであり、それ以上の介入には留意が必要である。

また、物を作っても一体これが商品になるのか、どうすれば商品になるのか、どこで売ればいいのかなど、市場や流通、交通手段の問題があり、まだ物作りを始めたばかりの村の女性は「これは売れる！」と誉められて嬉しいけれどもどうしていいかわからない状況にあったように思う。「台所コンクール」の例も私は大変面白いと思ったが、村の女性たちにはぴんとこないようであった。つまりこういった個々人で取り組めるレベル以上の活動については、総合的にコーディネートする役目を持った普及員の介入が不可欠と思われる

---

16 この章では日本の生活改良普及員を、その愛称である「生改さん」と記した。

ので、住民というよりはむしろ普及員への働きかけが必要になる。村での日本人生改さんによるワークショップが一過性のものである限り、インパクトはあっても住民にとっては「イベント」で終わってしまう危険性があるようだ。

2）現場の普及員

普及員の活動に対するコメントをするためには、村の状況を見て、住民の話を聞くだけでは不十分で、普及員が通常どのように活動しているのか、どのように住民と接しているのかを把握する必要がある。できれば紙漉きのワークショップなど現地の普及員の実際の活動を見学できればよかったのだが、今回はその機会がなかったのが残念である。村でのワークショップでは普及員が調査団のホストをするという認識があったのか、普及員たちは料理や飲み物の準備、会場設置でワークショップの間中忙しく立ち回っており、話し合いにはあまり参加してこなかった。

今後の課題としては、生改さんから指導を受ける対象は普及員だということを明確にし、また、普及員も自分が何かを学ぶという自覚を持ち、ワークショップの間は普及員が積極的にかつ集中して参加できるよう配慮することが望まれる。

今回普及員に調査団用の食事を用意するよう指示した行政官は、村人の料理は衛生的といえないのである程度衛生の知識のある普及員が料理した方が良いと判断したといっていた。当地では会場設営は普及員がするのが通常らしいが、このように行政官が村人のレベルを信用していないとは残念なことである。もし村人の料理が衛生的でないとするなら、この絶好の機会を利用し、衛生的な調理方法の講習（手を洗ってから取り掛かる、水を煮沸するなど）を企画するのも一考だっただろう。日本でも何か催し物があるときには普及員は村に泊まりこんで住民と一緒に準備するそうで、これは普及員にとって農家と一緒に作業するチャンスでもあり、後々にこういうイベントは話題に上り、人々の印象に残るから好都合だという体験談を生改さんから聞いた。このように普及員は調査団のホストとしてだけではなく、自分が何かを学ぶという自覚を持ち、機会を活かす工夫ができると良いだろう。

ワークショップでは低予算でできる普及員の具体的活動案（「台所／レシピコンクール」や「集落内道路の整備」、「生活時間調査」など）が盛りだくさんで、普及員には参考になったのではないかと思う。ここで重要なのは、これらの活動のエッセンスは日本の場合「考える農民を育てる」という普及理念に基づいた「住民に考えさせるための手段」であるということだ。ただ現場活動を真似ればよいのではない。それぞれの活動が立案された背景や意図、実施のプロセスなどを普及員が理解し、自分の現状に照らし合わせて、学んだことを自身の知恵と工夫によって適用できるようになることが望ましい。こういった応用力が、マニュアル活動では対応できない、複雑な現状に向き合う草の根レベルの普及員に求められている能力である。今回のワークショップで与えたインパクトを、応用力まで発展させるためには研修などの形でより長期的な働きかけが今後必要となる。

3）普及（行政）担当者

日本の生活改良普及員が農村現場で活躍できたのは、農林省と地方行政による協同農業普及事業として、生活改善事業も位置付けられており、また普及員の地位も行政の中で確立されていたからだと分析する声もある。

日本の場合、中央行政からの上意下達式の連絡系統と、住民からの下意上達式の連絡系統が確立していることが、生活改善普及事業の特徴として挙げられる。例えば山口県では農林省－県庁農政部経営普及課－各普及所という行政のラインと、普及員を通して現場の声を吸い上げる専門技術員集団の二系統あり、この二本のラインが上手く機能しているそうだ。事業予算を取るためにも地方行政のヒエラルキーの中で、住民の生の声を上げていき、生活改善事業の地位を確立していかなくては現場の普及員が安心して働ける環境が整わない。

また、日本の普及員の恵まれているところは、研修制度が充実していることではないだろうか。全国からの普及員が一堂に会する中央研修から地方レベルのブロック研修、県、そして普及所レベルでも様々な学びの機会が提供されている。こういった研修は技術の研磨だけでなく、普及員間の情報交換、横の連携構築の場としても有益である。研修では衣食住などの分野ごとの生活技術だけでなく、教育学、社会学に基づく普及手法の講義や実技が、数日から数ヵ月、合宿形式や通信教育などで学ぶことができる。

こういった行政面と技術面両方からのサポートを得て、日本の普及員はその地位が守られ、休日も私費も注ぎ込んで職務に打ち込むような稀に見る高いモラルと、質の高い仕事が達成されてきたのではないだろうか。

住民と普及員がいくらやる気になっても、行政であれ民間であれ、機関や制度がその活動をサポートできなければ、活動の発展や持続性が維持できなくなる可能性が高い。ある NGO がある東南アジアの国で普及員の養成に 3 年かけて取り組んだが、普及のシステムが行政にも NGO にもないために、人材が育っても活躍の場がないという結果になってしまったという[17]。持続的な活動のためには普及システムあるいは普及員の支援体制の整備が必須だということをこの事例は示している。

普及業務を総括するポジションにいる人には、現場レベルの活動だけでなく、日本の全般的な普及事業体制から参考になるところを学んで欲しい。「技術しか教えない普及員」から、「考える農民を育てる普及員」へ変えていくためには、いくら理論を講義しても意味がない。まずは普及業務担当官を対象として、生改事業と研修のあり方を日本の事例から学ぶことを目的とする数週間の研修プログラムを組んではどうだろうか。特に開発調査スキームにおいては、開発調査の成果品として作成されたマスタープランが、持続的に実行され、実益を伴うものとなるよう、マスタープランの実施部隊となる人材（担い手）の育成に、プランの作成時から同時進行で取り組む努力が必要だろう。

4）コンサルタントおよびその C/P

---

[17] 詳細は平成 14 年度「農村生活改善協力のあり方に関する研究」検討会報告書　別冊　検討会議事録第 2 回検討会の頁参照

前述したとおり今回我々が調査した開発調査プロジェクトには日本人コンサルタント数名が現地C/Pとともに活動に励んでいる。このプロジェクトが本調査団のホスト役で、指導対象は村人であり普及員であり行政官であったが、時々このあり方に疑問をもった。

6ヵ村の活動状況を調査し、村人・普及員との直接討議を数回した上で、開発調査プロジェクト関係機関の行政官に対するセミナーにおいて、生改さんがその印象を報告したが、これだけでの現状把握では情報が少なすぎ、差し障りのないことしかいえないという危惧を抱いた。これは数日しか現地に滞在できない短期調査団の一般的な悩みでもある。

色々とコメントした中で「日本では普及員には普及するもの（例えば紙漉き、石鹸作り）の技術つまり「普及素材」と、それらを普及するための「普及手法」の二つの技術を別々に捉え、この両方の技術研磨が必要だと考えている。マレイシアでもこういった観点から普及員研修を展開してはどうか」と提案したところ[18]、この部分をある研修担当者は「マレイシアの普及員は技術が未熟」と受け取ってしまったために不必要な誤解を招いてしまった。セミナー参加者の大半からは「大変良いコメントだった」とポジティブな反応があった[19]とはいえ、こういう少数意見の過激な反応も真摯に受け止めるべきだろう。

こういった無用な誤解は、双方に悪印象を与えるだけでなく、現地で長期にわたり活動しているプロジェクトにも悪影響を与えかねないことを自覚し、よほど入念な打合せをしない限り、短期調査団が相手国側に直接指導することは慎むべきではないだろうか。むしろ今回の場合、短期調査団のコメントは日本人と現地C/Pのプロジェクト担当者と話し合った方が有効だったのではないかと考える。プロジェクト担当者は、日本からの短期調査団と、相手国側行政官の両方の事情や文化に通じ、クッションとしての役割を果たせるのではないだろうか。

5）世代の違う日本人開発ワーカー

今回は生改さんから村人、普及員、行政官と様々な人に対する働きかけを行ったが、実は一番多くを学んだのは、全行程同行させて頂いた若手開発ワーカーとしての私ではないかと思っている。村歩き、村人との接し方、質問・発問の仕方、態度、同行者との車中・食事中の会話などから学ぶことは数多くあった。

生活改善研究に携わる者として、ベテラン生改さんの方々にインタビューさせて頂いたことは何度かあり、昭和20－40年代の活動状況を時には写真を見せて頂きながらお聞きしたが、今回実際に生改さんがフィールドに立ったとき、何を見、いかに動くかを目の当たりにでき、開発ワーカーとしても大変勉強になった。例えば村を案内してもらい水状況やトイレなどいろいろなものを見てから、この村の女性グループに生改さんは「レシピコンクール」を提案した。その理由を尋ねたところ、「何軒かの台所を見たがどこの家も深鍋と中華鍋くらいしか置いてなかった。あれでは料理のレパートリーも少ないのではないかと思う。今日の会にも体調を崩して参加していない人が何人かいるという。栄養バランスの

---

18 詳細は付属資料⑦吉武和子報告要旨参照
19 付属資料⑧セミナーアンケート結果参照

取れた食事が大事だという啓蒙も必要だと思う」と教えられた。なるほど、これならお金もかからないし、周りの賛同も得やすく、すぐにグループで取り組めそうだ。一緒に歩いていても私では気がつかなかったが、生改さんなら「鍋」からそういった活動が見えてくるのかと目から鱗が落ちた。私はこの一件から、台所を見るときはただ単に衛生状況やカマドの様子を見るだけでなく、調理器具、皿の種類や数、物の配置、動線に工夫があるか、家の中で台所のあり方に重きが置かれているか、豊かに暮らす意識があるかなどをチェックすることを学んだ。

理論を説く人はいても、現場での長い実践に裏打ちされた経験から具体的な活動案までコメントできるようなベテラン開発実践者はまだまだ少ないのが現状ではないだろうか。特に社会系の開発ワーカーには若手が多く、また、実践の場を途上国だけに求め、現場で孤軍奮闘する場合が多いように見受ける。知識と実践と知恵の宝庫のベテラン生改さんは、農村開発のためのフィールドワーカーとしてもまさに日本の宝であり、国内はもとより開発の文脈でも、若手ワーカーのアドバイザーをはじめ、様々な活躍の可能性があるだろう。

（2）どのように発信するか

日本の「生活改善」経験をより多くの人に理解してもらうためには、我々の発信方法自体を「普及手法」のモデルとして提示できるくらいの効果的な方法を身に付けることが先決ではないだろうか。例えば紙の原稿を読み上げながら実践的「普及手法」について説いても説得力はない。生改さんが用いる様々な伝え方のエッセンスだけでも抽出し、ワークショップやセミナーで実証できるようにすることが今後の課題である。ここでは特に今回セミナーで用いた二つの資料についての所感をまとめる。

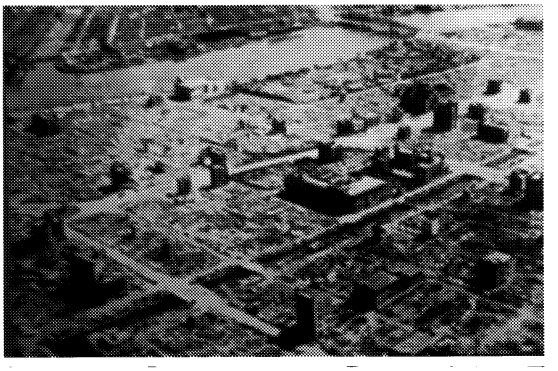


写真２４．発表で使用した戦後日本の写真

（出典：スライド『日本の農業・農業開発と人口』APO）

1）廃墟となった戦後日本の写真

セミナーで用いた太田のパワーポイントには、1945年夏の廃墟となった東京の写真が使われていた。戦後日本は廃墟から、ゼロからあるいはマイナスからスタートしたことを説明するための一コマだが、戦争が絡んだ対日感情が複雑な地域でこういった写真を用いて説明するのは少々無神経ではないかというコメントが本調査団内からあった。この点マレイシア側の反応についてセミナーの感想を取りまとめていた現地開発調査団に問い合わせたところ、「参加者には若い戦後世代が多かったせいか日本も廃墟から立ち上がったという印象は強くとも、自国の歴史に繋げ嫌悪感を持つようなことはなかったようだ」という回答であった。とはいえ、相手国の対日感情に配慮しすぎることはない。時と場所と相手に応じた発信の仕方を、よりセンシティブに工夫すべきだったと反省する。

2）女性起業家の紹介ビデオ

今回セミナーで上映したビデオは、セミナーの趣旨、報告の流れとして適当ではなかったという印象がぬぐえない。太田の第一報告では昭和 20-40 年代の写真を見せながら、資金がなくてもできる活動、現場の声を汲み上げる活動を紹介した。しかし、それに続くビデオの内容が 1990 年代の、生活改善資金を利用して起業化した女性グループの活動紹介だったため、真新しい近代的な加工所やレストラン、直売所などの建物や設備に関心が集中したようだ。鑑賞後の質問も「設備にかかった総額」や「補助金と自己負担金の割合」など資金に関することが中心で、こちらが強調したかった「起業化は 20 年に渡る生活改善グループ活動の結晶」であることや、「だからこそグループ運営が機能している」ということはビデオでも説明されていたにもかかわらず、ほとんど彼らの印象には残らなかった感がある。本研究会でも様々な年代、地域別の写真、ビデオ、スライド等の映像資料を収集しているのだから、現場の状況に合わせたこれらの利活用を進めていくべきだろう。そのためには年代、場所だけではなく、「どういった開発現場の参考になりそうか」という開発協力の視点から見たコメントを加えたこれらの資料のリスト化が望まれる。

第Ⅸ章　作成・収集資料一覧

1．作成資料

	題	内容	出所
1	マレイ語版　「ジャムについて」	イチゴ、りんご、ブドウジャムの作り方を絵入りで説明。「煮詰めの終了確認方法」などの解説もある。	山口農業改良普及所
2	マレイ語版　「男女の自立度…あなたは何点」	家庭内の男女分業体制やジェンダー差に関する意識を高めるためのアンケート	山口県農林部経営普及課
3	PAL 方式ビデオ "Rural Women's Entrepreneurship in Japan"	広島県などにおける女性の起業活動の状況（女性グループが、地域で取れる農産物を使った郷土料理を創作し、加工所・レストラン経営などをするまで等）を説明。農林水産省作成。	農林水産省
4	PAL 方式ビデオ "Promoting the Family Management Agreement in Japan"	家族経営協定の紹介。農林水産省作成。	農林水産省
5	PAL 方式ビデオ "Youth Visioning Workshop"	若者を対象とするワークショップ。「フィリピン共和国農村生活改善研修強化計画」作成。	Agricultural Training Institute-Bohol, JICA
6	PAL 方式ビデオ "Planning Workshop for Rural Life Improvement"	農村生活改善のためのワークショップに概要。「フィリピン共和国農村生活改善研修強化計画」作成。	Agricultural Training Institute-Bohol, JICA

2．収集資料

	題	内容	収集元
1	Project Development of Rural Women Entrepreneur Group (KPWM) by the Department of Agriculture, Sabah	DOA の農村女性起業化グループ活動進捗状況紹介	DOA
2	研修モジュールリスト	DOA 普及員が、農民への研修のときに使用している基本的なモジュールのリスト。 家族の健康から野菜栽培、経営計画など全部で１４ある。	DOA
3	農産物加工、料理のレシピ（マレイ語）	果物の加工やビスケットの作り方、野菜ジュースの作り方など、約 100 種類のレシピ。普及活動に利用している。	DOA

第Ｘ章　付属資料

① パイロット活動現況
② ２月１１日　面談者リスト
③ ２月１８日　セミナー参加者名簿
④ 太田美帆セミナー報告パワーポイント
⑤ 富田祥之亮セミナー報告パワーポイント
⑥ 藤井チエ子セミナー報告要旨
⑦ 吉武和子セミナー報告要旨
⑧ ２月１８日　セミナーアンケート用紙（「マレイシア・サバ州農村女性地位向上計画調査」作成）
⑨ ２月１８日　セミナーアンケート結果（「マレイシア・サバ州農村女性地位向上計画調査」作成のものを編集）

付属資料①　パイロット活動の現況

「マレイシア・サバ州農村女性地位向上計画調査」におけるパイロット活動の現況

Project No.	項目	進捗状況	Taskforce Team
1	ジェンダー教育	アクセスが難しい地域での女性活動支援方策の思考。パンダン・マンダマイ、パンダン、マンダマイ、ルグ4集落（ピタス県）を対象。パンダン・マンダマイ、マンダマイ、パンダン＋ルグの希望者から成る3女性グループに対して、年間活動・資源マップ作りワークショップ、女性自身の生活や村での役割を考える Awareness ワークショップ等を 5 回実施した。また、未利用資源を活用した紙やろうそくの試作デモ及び研修（プロジェクト 3）にリーダーが参加。グループ内で紙作りを始めている。	GTT
2	ワンストップ	女性グループ活動支援のためのワンストップのあり方について KPLB、UHEWS と検討。その結果、JKKK（Chairman と Women's Affair 担当）に各村ごとの基本的なワンストップ・サービス機能を持たせることとした。ラジオ放送での情報提供も検討中。3 月に KPLB が実施する JKKK 研修（北部地域対象）を利用して研修 2 日目に JKKK の現状とポテンシャル把握、ワンストップへの協力依頼と研修ニーズ把握ワークショップを実施予定。	GTT
3	未利用資源活用	廃材等未利用資源の活用を考えるため、村の中の資源マップを作るためのワークショップを実施。未利用資源利用のデモンストレーションをカリプオン（ピタス県）、トランカパス、ミニャック（以上コタ・マルドゥ県）で実施。パンダン・マンダマイ周辺 4 集落のリーダーも希望により追加参加。これらの集落からの 4 女性グループ（各集落の希望者から選ばれた女性リーダー）に対して、各グループが選択した「雑草を利用した紙作り研修」、「蜜蝋を利用したろうそく作り研修」を実施。KK 土産店で製品として販売、或いは包装紙としての活用を目指す。Awareness セミナー、グループ活動推進ワークショップを GTT が実施予定。	HTT
4	海草養殖	女性グループを対象に水産局普及員による技術移転を実施し、第 1 回目の海草養殖・収穫を完了した。簡単な乾燥処理を行い中華系の工場へ販売。今後は、生産技術の向上に加え、グループ活動強化、経営改善、簡単な加工（ピクルス生産）のための研修を行う。また、衛生や健康等の生活環境改善研修も並行して実施する予定。	FPTT
5	KPD タムー	コタ・キナバルの KPD 運営タムー（ローカル・マーケット）の運営改善と農村女性起業家支援のための機能強化を行い、農村女性アンテナ・ショップ拠点、活動のショー・ケース、アンテナ・ショップとなることを目指す。品質管理、マーケティング、品質改善（新製品開発）等の研修も企画・実施する。現在、タムーでの販売活動は月 2 回（隔週日曜）の実施のみ。	MTT
6	クダット（観光との連携）	ゴンビザウ（養蜂）、スワンカップ（ゴング）、ティナンゴール（ビーズ細工、手工芸品）、ババンガゾ（ロングハウス宿泊施設）の既に女性グループ或いはコミュニティで開始している活動が、クダットに隣接していることから、4 集落の連携ネットワークを立ち上げ、協力してのアグロ・ツーリズム推進による製品販売促進、コミュニティ開発を目指す。県行政官（DO）も参加し、4 集落の連携ネットワークを立ち上げ、改善のための協議を行い、トイレ改善、標識設置等の活動を展開中。KPD 等の中央組織の関わり、支援内容を検討中。	MTT
7	ジェンダー研修	DOA 普及員 207 名を始め、KPD 普及担当者などの研修体制改善を狙う。1 月、2 月とタスクフォース内の研修（Gender Awareness、Participatory Approach）を実施した。昨年 10 月には普及員（トレーナー候補）の現状とポテンシャル把握のための第 1 回研修ワークショップを実施。2 月末に第 2 回	GTT

		研修ワークショップ（開発での普及員の役割、普及活動自己・グループ評価）を実施予定。	
8	農村女性支援ネットワーク	農村女性支援関連機関の連携組織を確立。連携強化のための活動を企画、実施。Women's Day 展示会では本プロジェクトの活動を紹介。全 11 のパイロット・プロジェクトのモニタリング会議を毎月実施。現在、本プロジェクトのためのモットー、スローガンを検討中。また、連携組織として、農村女性地位向上に必要な政策策定、規定改善等の提言を取り纏める予定。	IFTT
9	手工芸品連携	サバ州機関、連邦機関で様々な機関が個別に活動している手工芸品関連機関が、農村女性支援のためのネットワーク作りを行う。各機関のプロジェクト、対象製品、対象グループ等の洗い出しを実施。手工芸品のサバ・ブランド・イメージ確立のために、PKKM ホームページでの広報を始めた。今後は、サバ伝統手工芸品広報パンフレット作成、サバ・ブランドのタグ作成、土産店へのプロモーション等を行う予定。	HTT
10	YUM 強化	YUM23 支店のうち 6 支店においてマイクロファイナンス業務管理改善プロジェクトを実施。コンピュータ導入によるデータ管理の整備、手続きの簡略化を目指す。機材とシステムの導入を終え、現在、スタッフの研修実施中。今後は、データを利用した顧客サービスの向上、顧客である農村女性とのインタフェースであるローン・スーパーバイザーや女性グループリーダーへの Gender Awareness 研修等を実施する予定。	IFTT
11	政策立案支援強化	第 1 回として、本プロジェクトとパイロット・プロジェクトの説明セミナーを実施した。第 2 回セミナーとして、2 月 18 日に日本の生活改善活動紹介セミナーを実施した。	IFTT

GTT: Gender Taskforce Team, HTT: Handicraft Taskforce Team, FPTT: Food Processing Taskforce Team, MTT: Marketing Taskforce Team, IFTT: Institution & Financial Taskforce Team　富田がまとめたものを開発調査団総括石田洋子氏に加筆修正していただいた。

付属資料② 2月11日 面会者リスト

2月１１日 面会者リスト

機関	面会者名	役職
ＤＯＡ サバ州農業局	Mr. Jurij B. Awang Yaccob	Director
	Mr. Dandan B. Hj. Aliddin	Deputy Director
	Mr. Aziz B. Hj. Abd. Latip	Assistant Director
	Ms. Hjh. Dg. Rayanih Hj. Ag. Hamit	Agriculture officer
KPD サバ州農村開発公社	Mr. Hj. Pgn. Othman Bin Hj. Pan Gamok	General Manager
	Mr. Mohd. Dos Ismail	Deputy General Manager
	Ms. Nemy Ontol	Human Development Supervisor
YUM サバ州マイクロクレジット基金	Mr. Juif. W. Anruer.Adzim	General Manager
	Mr. Freddy. Dantae	Deputy General Manager
	Mr. Abdul Hamid Sami	Deputy General Manager
	Ms. April Susan Roland	PRM

付属資料③　2月18日　セミナー参加者リスト

2月18日セミナー参加者リスト

セミナー：The Study on Development for Enhancing Rural Women Entrepreneurs in Sabah, Malaysia
Pilot Project 11
Meeting of Sabah Policy Makers and Japanese Experts on " Japan's Experience of Rural Development and Improvement of Living Conditions in the Rural Area "

日時：　平成15年2月18日（火）午前8時30分～午後2時

場所：　Beverly Hotel

NO	NAME	POSITION/DEPARTMENT
1	YB. Datuk Siringan Gubat	Assistant Minister, MAFI
2	YM. Datu Basrun Datu Mansor	Deputy Permanent Secretary, MAFI
3	Seto Mun Yee	Group Marketing Manager, KPD
4	Patrick Mojinun	ADO Matunggong
5	Hjh. Dg. Rayanih Hj. Ag. Hamit	DOA
6	David Linggian	ECO. Dev. Officer, YS
7	Maimunah Mohd. Shariff	Executive Officer, KPD
8	Abdul Malek Chua	Planning Officer, KPD
9	Danna O. Ontol	UPEN
10	Haris Bin Abdullah	FAMA
11	Adeline Chee	Executive Officer, KPD
12	Theresa Moguil	Executive Officer, KPD
13	Rainal Lasumin	Training Officer, KPD
14	Sanseh Masi	Administrative Officer, KPD
15	Ito Yukinori	JICA
16	Mika Matsumura	JICA Study Team
17	Yoko Ishida	JICA Study Team
18	Fujii Chieko	JICA
19	Kazuko Yoshitake	JICA
20	Miho Ota	JICA
21	Tomoko Hattori	JICA
22	Mustafa Alba Ibrahim	Malaysian Handicraft
23	Juif Adzim	YUM
24	Mohd. Sayuti Abdullah	KPLB
25	Felecia Dora Tiongin	KEMAS
26	Balwant Singh Kler	SPS
27	Mohd. Dos Ismail	Deputy General Manager, KPD
28	Kalimin Sahadi	MAFI
29	Jurij Awang Yaccob	Director, DOA
30	Ooi Siok Thong	MAFI
31	Hjh. Subiah Laten	UHEWS
32	Nemy Ontol	Human Dev. Supervisor, KPD
33	Winnie Yee	Local Consultant
34	Daisy Livinu	YUM
35	Genevieve Roman	RA JICA Study Team
36	Marina Aman Sham	RA JICA Study Team
37	Neil N. Sagidon	RA JICA Study Team
38	Amelia John Yagot	KPD
39	Hj. Ag. Othman Hj. Pgn. Gamok	General Manager, KPD

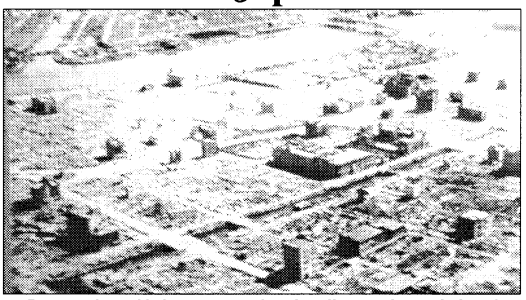
Empowering Women through Livelihood Improvement Programme

～ Rural Development Experience in Post-war Japan～

Miho OTA
Livelihood Improvement Programme (LIP) Study Team

18/2/2003 1

Ruined Japan 1945



- **Destruction of infrastructure by airstrikes and atomic bombs**
- **Reduced farm production caused by lack of manpower and investment**

(APO "Agricultural & Rural Development and Population in Japan")

18/2/2003 2

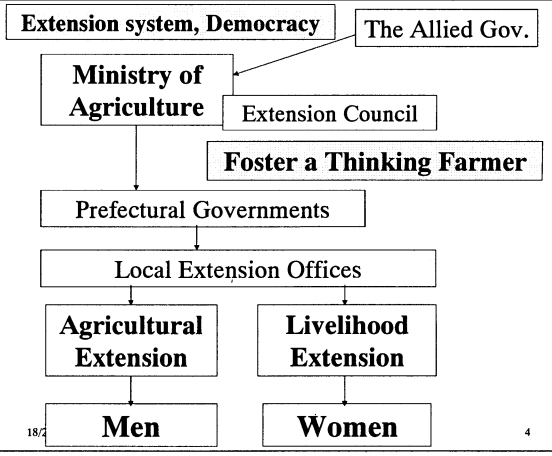
Urgent Issues on Agriculture

- **Increase Food Production**
- **Efficient and Effective Farming**
- **Stabilisation of Social Order**

⇩

The Cooperative Agricultural Extension System 1948

18/2/2003 3



18/2 4

"A Thinking Farmer"

Is aware of his/her problem

Can try the solution by him/herself

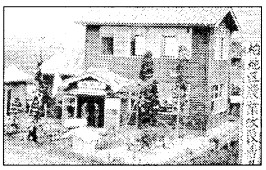
Can suggest some solutions to the problem

Is responsible to all these processes

18/2/2003 5

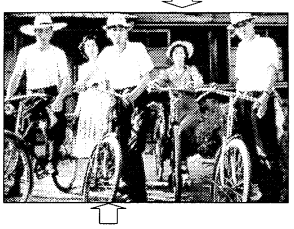
Extension System

Extension Office



(Chiba)

Livelihood Extension Worker (*Home Advisor*)



(APO "Agricultural & Rural Development and Population in Japan")

Agricultural Extension Worker (*Farm Advisor*)

18/2/2003 6

Agricultural Extension

- To develop and distribute agricultural technologies in order to increase production
- Modernization of Agriculture

⇩

Directive Approach,

Transfer-of-Technology Type Extension

18/2/2003 7

Livelihood Extension

- To provide comfortable living and good working conditions for farming family
- Rationalization of various aspects of daily life

⇩

How can we do this?

18/2/2003 8

LIP Approach (1)

Listening to Rural Women's Voices

("A Day in the Life of a Livelihood Extension Worker")

18/2/2003 9

LIP Approach (2)

Starting with People's Needs

Cooking Class

Ms. Honma, Yamaguchi, 1950s

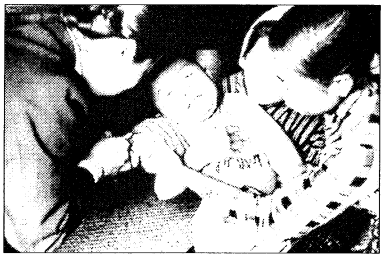
Washing Class

("A Day in the Life of a Livelihood Extension Worker")

18/2/2003 10

LIP Approach (3)

Collaboration with Public Health Nurses



(APO "Agricultural & Rural Development and Population in Japan")

18/2/2003 11

LIP Approach (4)

Involving All the Community Members

Livelihood Fair

("A Day in the Life of a Livelihood Extension Worker")

18/2/2003 12

Improved Cooking Stove

(APO "Agricultural & Rural Development and Population in Japan")

(From Ms. Takaoka, Ehime)

18/2/2003 ("A Day in the Life of a Livelihood Extension Worker") 13

Fund Raising

"Egg Saving"

(APO "Agricultural & Rural Development and Population in Japan")

18/2/2003 14

The Role of Extension Workers

- **Go into the field by themselves**
- **Listen to the people's voice**
- **Assist and encourage people's efforts**
- **Collaborate with other sectors**
- **Promote group activities**
  =Farmer-to-Farmer Approach

18/2/2003 15

Rural Women Today

- Women in the 60s or older are lively and still active as opinion leaders in politics, enterprises and community activities
- 64% of rural women entrepreneurs have experience in group activities of LIP

18/2/2003 16

Strategies of Fostering "Thinking Women"

Facilitate and promote group activities:

- Find local leaders and nourish their leadership
- Assist model projects through collective work
- Nurture unity and solidarity among group members
- Encourage women's self reliance
- Enhance harmony in a community

18/2/2003 17